

モダリティと焦点化・話題化の関連についての 認知言語学的考察

田 林 洋 一

1. 序

本稿では、モダリティと談話の焦点化・話題化との意味的な関連について認知言語学的な考察を行うことを目的とする。まず、モダリティの概念として中右(1994)の階層意味論モデル(Hierarchical Semantic Model)を概観し、若干の考察を加える。次に、否定を中心とした焦点化と話題化について、モダリティと絡めて論ずる。

2. 認知言語学の歴史的背景

認知言語学とは、Chafe(1970)の概念主義に始まり、Lakoff & Johnson(1980)で爆発的に増加した当時の伝統的生成文法と対立する理論である。しかし、Chomsky(1965, 1981)等を始めとする確固たる説明的枠組みというよりも、生成文法では解決し切れなかった言語の諸相を独自の理論で体系的に説明付けようとした結果、その潮流が徐々に出来上がってきたという点で、強力な一理論の推進派というよりも複数の理論の統合的な流れと見たほうが実情に即している。その中でも中心的な役割を担っているのが、Lakoffらが目指した生成意味論の流れであるが、説明原理の破綻から、自然消滅した。生成意味論の破綻は二つの点で重要な意味を持っている。一つは統語的説明原理をそのまま意味に用いてもうまくいかないということが示されたことで、意味には統語とは違った別の方法論的アプローチが必要であるという点である。もう一つは生成意味論の研究の成果が、そのまま現在の認知言語学に応用されているという点である。

本稿では、メタファーやメトニミーを中心としたLakoffやLangacker(1987, 1991)の認知意味論、認知文法とは対極をなす、生成文法の枠組みから意味の問題を捉えたJackendoff(1990)などの研究、特に中右(1994)の立場から、モダリティと認知言語学の関連について若干の考察を加えてみたい。

3. モダリティの先行研究と階層意味論での位置づけ

中右(1994)は生成文法の枠組みを大幅に見直し、同じ次元ながらも全く独自の理論を発展させた、Jackendoff(1990)の概念意味論(Conceptual Semantics)にも近い位置を占める階層意味論(Hierarchical Semantics)と呼ばれる言語モデルを作り上げた。中右の前提は以下のような認知主義の立場を取る。

人間言語の文法体系(grammatical system)は基本的に自律的な認知領域をなすとしても、他の認知体系から完全に独立したものではない。わけても文法体系の一部をなす意味体系(semantic system)は概念体系(conceptual system)と内在的な連関性を持つ。ただし、言語記号化できるかぎりの概念だけが言語

の意味体系のなかに反映される。

中右 (1994: 4)

その上で音韻構造、統語構造に意味構造を結び付けるものは何か、という問題提起をしている。Jackendoff (1997) はこの問題に対応規則 (Correspondence Rule) という説明を与えているが、中右はこの点に明解な回答を与えてはおらず、統語論、音韻論、意味論及び概念体系 (語用論的側面を含む広義の意味論) はそれぞれ概念体系とインターフェイスを持つ文法体系内で関連性を持つという生成論と認知論の統合を図っているのみである。中右の理論は Chomsky (1981) に代表される統語論中心主義 (Syntactocentrism) とは噛み合わないが、中右が Chomsky の理論をたたき台としている点から、生成文法の影響が根強く残った理論という意味合いにおいて、Jackendoff の概念意味論に似る。

こうした前提に先立ち、中右は意味構造に自律性を提唱する。つまり、文の意味はそれ独自の意味要素の階層的配列型からなり、それ故必然的に文の意味も一定不変の骨格構造を形作り、意味構造は統語構造と独立して存在する、という立場を取る。中右の理論の骨格となるのが「意味構造は階層構造をなす」というものであり、これは今まで Bloomfield (1933) らに始まる直接構成要素分析の主張する「文は構造を持つ」という基本概念に、更に生成文法の枠組みの視点から Kajita (1968) の統語論における階層構造を意味論に応用したものと解釈できる。だが、Kajita が純粋に統語的問題を扱い、統語論中心主義を念頭に置いているのに対し、中右は統語構造とは全く別の意味構造を規定し、意味構造それ自体が文を生成していくという点で、生成意味論や認知言語学に近いアプローチを取る。

さて、文の意味は命題的な成分だけとする考え方は、Chomsky の「理想化された言語体系」 (Idealized Language System) の中でのみ可能な考え方であり、自然言語にはそぐわないという面があった。つまり、生成文法では文の意味は知的意味 (Cognitive Meaning) だけに限定され、情的意味 (Emotive Meaning) はことごとく排除された。即ち、初期の変形文法は「受動態と能動態は同一の意味を持つ」「二重否定は肯定である」というように完全に様相論理的な言語研究しかして来なかった。命題内容は文の成分の中でも中核を成す存在ではあるが、例えば、蓋然性や可能性を表す表現や図と地の逆転現象における語用論的・意味的側面は命題内容のみでの考察では捉えきれない。従って、命題内容とモダリティを二極化して考察するのは自然言語研究においては必要条件となりうる。この場合の二極化とは、命題態度が内在的な義務的成分であるのに対し、発話態度は外在的な非義務的成分である、ということである。即ち、文全体の意味は発話の意味領域であるのに対し、そこから発話態度を除いた命題成分は文の構文的意味領域を占める。

Kajita にせよ山田 (1908) の陳述論や時枝 (1941) の言語過程説にせよ、古典的・伝統的言語観では文及びその発話の意味は命題内容+モダリティという立場を取っている。つまり、ある命題に対して、話者がどういう態度で述べているかという語用論的な要素を文の意味構造に求めている。時枝の主張する文の入子型構造では、以下の例文を比較し、文を「モダリティ+命題内容」と、単に陳述のみを表す「命題内容」の発話の二つに分けている。

- (1) 雨が降った = 命題内容+モダリティ
- (2) 雨が降る = 命題内容のみ

□で示した箇所は命題内容を表し、___で示した箇所はモダリティ、つまり発話態度を表す。即ち、命題内容が完全に文の中心であり、モダリティ表現はその命題内容を語用論的に補完する。一方、渡辺(1971)は構文的職能を基盤にし、文とは素材表示の職能と陳述の職能に分けられ、命題とモダリティは対等であるとする、意味論的統語論とも呼べる観点を採用している。

だが、先に挙げた陳述論を含めた先行研究では以下のような文を分析できない。

(3) □雨が降っ たらしい = 命題内容+モダリティ+?

(3)の命題内容は一律に規定できるが、モダリティは曖昧である。「た」と「らしい」は陳述論によれば両方とも話者の態度を表すモダリティ表現であるが、それが二分割されている。一方、以下のような解釈もありうる。

(4) □雨が降った らしい

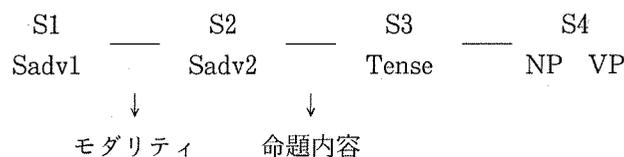
「た」が過去という客観的事象を想定した表現の指標であるならば、「た」を命題内容として扱う(4)の解釈の方が自然である。だが、(1)と比較すると、上記の解釈では命題内容及びモダリティの境界線が曖昧になる。従って、以下のような解釈も考慮に入れる必要がある。

(5) □雨が降っ たらしい

(5)は(1)とパラレルの関係にあるが、モダリティが明確に特定されていない。即ち、(1)では「た」、(5)では「たらしい」という、異なる表現が存在するのに対して、その構造は同一(モダリティ)であると説明されることになる。よって、陳述論では文構造の命題内容とモダリティを区別するための最終的な解決を得ることはできない。

構造的聴能にも同様の問題がある。即ち、命題内容に相当する素材表示の職能と、モダリティに相当する陳述の職能の区別、更には陳述の職能内における統述と断定の境界線も曖昧である。従って、両理論とも命題内容とモダリティの明確な区別ができないという欠点がある。

Kajita(1968)は命題内容とモダリティを明確に区別している。Kajitaは文、即ちS(sentence)に四段階の階層構造を想定し、そのうちS1はSadv1に相当するモダリティ、以下S2はSadv2、S3はTense、そして文の骨格を成すS4はNPとVPにそれぞれ相当する命題内容(NPとVP)と区別している。これを図式化すると、以下ようになる。



中右は前述のようにKajitaの統語的階層構造を意味部門に当てはめた形を取っているが、そのままの形を踏襲したわけではなく、文には統語構造とは別に、一定不変の骨格的意味構造があるとした。

中右の階層意味論モデルにおいて特徴的なのは、モダリティを談話モダリティ(Discourse-Modality, 以下D-MOD)と文内モダリティ(Sentence-Modality, 以下S-MOD)の二つに分けて命題内容との差異を明らかにしたこと(つまりモダリティと命題内容の区別をより明確にしたこと)、そして命題内容の最も

高次の位置に極性 (POL) を置いて中立命題と同列にしたことにある¹。これは以下のようなスキーマで表示される。

意味展開規則

M(S) ²	→	D-MOD ¹ M(S) ¹
M(S) ¹	→	S-MOD ¹ PROP ⁴
PROP ⁴	→	POL ³ PROP ³
PROP ³	→	TNS ² PROP ²
PROP ²	→	ASP ¹ PROP ¹
PROP ¹	→	PRED ⁿ ARG ⁿ (n ≥ 1)

M(S)	=	Meaning of Sentence	文の意味
D-MOD	=	Discourse-Modality	談話モダリティ
S-MOD	=	Sentence-Modality	文内モダリティ
PROP	=	Proposition	命題
POL	=	Polarity	極性, ポラリティ
TNS	=	Tense	時制, テンス
ASP	=	Aspect	相, アスペクト
PRED	=	Predicate	述語
ARG	=	Argument	項

中右 (1994: 15 一部改)

上記のスキーマでは、Kajita の Sadv 1 が D-MOD に、Sadv 2 が S-MOD にそれぞれ対応する。

階層意味論モデルの顕著な特徴として、前述したように命題内容の最も高次なものとして極性を設け、そして肯定も否定も表さない中立命題を設定したという点が挙げられる。伝統的生成文法 (例えば Chomsky (1957) など) では否定表現の付与はいわゆる変形であり、極性を決定するのは統語部門であるとしていた。だが、中右は中立命題と極性を同列の位置に扱うことによって、統語構造ではテンスが極性よりも高次のものだったのに対し、意味構造では極性がテンスよりも高次に来るということを証明した。まず、統語構造は以下のように説明される。

- (6) a. [[[[太郎は] 来] なかつ] た]
 b. Taro did not come.
 c. Taro no vino.

統語的には日本語の (6a) では「なかつ」という極性表現が、「た」というテンス表現よりも低い

1 中右は、話者の心的態度を発話態度及び談話モダリティ (Discourse-Modality)、命題に対する態度を命題態度及び文内モダリティ (Sentence-Modality) と呼んでいるが、そもそも談話とは文の集合体を表すものであるため「心的モダリティ (Mental-Modality)」とでも名づけた方がいいように思われる。なお「発話態度」という用語に問題はない。発話 (Utterance) は文でも単語単位でも行われるからである。これに対して「文内モダリティ」という術語も問題がある。通常、文とは命題とモダリティの組み合わせであり、中右が主張するのはそのうちの命題に対する態度だけだからである。従って、「命題モダリティ (Propositional-Modality)」とでも名づけた方がよい。なお、命題態度という術語に問題はない。

位置に来ている。英語 (6b) では否定要素を導入する際に Do-Support が必要とされるが、階層的
位置はテンスよりも低い。スペイン語 (6c) ではテンスは動詞に組み込まれており、動詞の方が否定
辞 no よりも階層的に高い。意味的な扱いについては以下を参照のこと。

- (7) Do you think [[they can come tonight?]]
(8) a. I believe [[so.]] so = they can come tonight
b. I believe [not. [φ]] φ = so = they can come tonight
c. I do not believe [[so.]]

(7) 及び (8) の各文から、(8c) の so は PROP3 を、そして否定語である (8b) の not は PROP4
を表していることが分かる。従って、意味的には極性表現の方がテンス表現よりも高次の位置に来て
いるということになる。

4. D-MOD と S-MOD の意味的側面

中右のモダリティの概念は「話し手の発話時点における心的態度」と定義付けられる。そして、命
題内容が客観的磁場を形作るのに対し、モダリティは主観的磁場を形作る。つまり、命題内容は現実
の現象そのものを表記するのに対して、モダリティはその時の発話者の主観的側面を重視する。この
区分けで重要なのは S-MOD の扱いである。即ち、D-MOD は主観的磁場を持つが、S-MOD は主観
と客観のどちらにも（あるいは中間に）位置することで、両者の解釈が可能なケースが生じることが
ある。まず、両者の区分けが明確な例を検討する。

- (9) Frankly I believe I have told a lie.

(9) の Frankly は発話行為への限定的な主観的態度、即ち命題内容への留保条件であり、D-MOD
と解釈される。そして、主観的に見える I believe は発話者の主観を示したものであるが、「私が信じ
る」という事象は既に生じた絶対的事実であるから、S-MOD は命題内容における客観的態度、即ち
真理値についての査定を意味し、命題態度と規定することができる。このモダリティの二極化構造が
ないと、陳述論を始めとするモダリティの一極化構造と同様、こうした文が解釈不可能になる。この
分析の根幹となっているのが主観と客観の区別であり、同じモダリティ表現内においても主観的モダ
リティと客観的モダリティ（命題内容のモダリティ）がそれぞれ存在するということになる²。

この客観的モダリティ表現は時にその役割が曖昧になることがある。即ち、ある対象物ないし表現
方法が一見客体と解釈されても、それを話し手の意識と融合すると主体と解釈される。(9) では
Frankly の存在によって I believe が客体と解釈されたが、以下の文ではその区別が曖昧になる。

- (10) I believe I have told a lie.

2 西村 (2000: 160) は以下の例を挙げて、Lyons (1983) や Langacker (1990) らが主張する主観性と客観
性の区別を行っている。

(i) I find her argument convincing.

Langacker らの主張によると、(i) は思考の主體的な話し手と比較して客観性が強い。一方、中右の主張
では I find が「主観的」となる。

(10) の I believe は (9) と比較する限りにおいて S-MOD と規定できるが、「私が信じているかどうか」が客観的な事実であるかどうかは (10) では発話者にしか判断できず、いわば表現者の主体化がされているかどうか曖昧である。Langacker (1991) の論を借りると、客観的話し手と主体化された表現が (10) においては融合しうる。従って、I believe を完全なる主観的表現、即ち D-MOD と解釈することも不可能ではない。つまり、主体化は語単位ではなく節、あるいは文単位でも起こりうる。主体化に対して、階層意味論では当該文の曖昧性という観点から説明を与えている。

(11) I think that Tom is a spy.

(12) a. わたしは トムが スパイだと 思う。

b. わたしは トムが スパイだと 思っている。

(11) の think には潜在的に二通りの解釈が可能とされ、(12a) の「思う」が瞬間的現在時の思考作用を指し示しているのに対し、(12b) の「思っている」は持続的現在時の思考作用を指し示している。そして、「テイル」型の現在進行形による表現の存在から、(12a) は統語的・意味的に無標であり、(12b) は有標的である。即ち、(11) が有標的かどうかは談話としての文脈に依存して決定される。一方、以下の文では談話的文脈に依存せずに自律的に有標性が決定される。

(13) I *always* think that Tom is a spy.

(14) わたしは つねづね/いつも トムを スパイだと 思っている。

(13) では always という副詞により、(14) の持続的現在時の思考作用の解釈しかない。よって、この文は有標的な表現であり、コンテキストによる意味の限定、Horn (1984) による話者指向に基づいた Q 原理 (Q-principle) の解釈を取る。そして、持続的現在時を指し示すという指向主体は、話す主体とは切り離された客観的表現のため、命題内容成分、即ち S-MOD と解釈できる。この点については Leech (1974) も I'm supposing that は I'm making the temporary assumption that の意味であると述べているように、持続的現在時は S-MOD であると分析されうる。

階層意味論は主体化の概念を取り入れず、あくまでも階層意味論モデル内において一つのテーゼを土台にして瞬間的現在時の解釈を分析する。

瞬間的現在時における接触可能性の原理 (Principle of Accessibility in the Instantaneous Present)

発話時点と瞬間同時に発現する心的態度のうちで、話し手にとって接触可能な情報となりうるのは、ただひとつ、話し手自身の心的態度だけである。

中右 (1994: 51)

つまり、(12a) の「思う」のように瞬間的現在時と解釈された発話の場合、発話時点と瞬間同時的な現在時の思考作用しか指し示せないため、その思考作用が話し手以外の人物に帰属するという可能性はあらかじめ原理的に締め出される、という解釈を取る。だが、以下の例文を観察するとこの原理に多少問題がある。

(15) He thinks that Tom is a spy.

(16) a. 彼は トムが スパイだと 思っている。(持続的現在時の思考作用)

b. #彼は トムが スパイだと 思う。(瞬間的現在時の思考作用)

この場合の話し手の主体である「私」は、「彼が」トムをスパイだと思っていることを前提として発話している実現的 (Realizative) な解釈を取り、有標的表現である持続的現在時の思考作用の読みしか存在しない³。この主体化の問題をより明確にした研究に、Austin (1962) の扱った行為遂行的発話の解釈がある。

(17) I state that he thinks that Tom is a spy.

(17) では I state が D-MOD, he thinks が S-MOD を指す。従って、「話し手の主観的心的態度」と呼べる表現 (即ち話者主体を言語表現に組み込んだもの) は (15) の中には存在しているものの、明示されていない。Benveniste (1966) も「行為遂行的発言は特定の状況下において、それも一度、ただ一度だけしか行使され得ない。個人的かつ歴史的行為である遂行的発言は、それゆえ繰り返すことができない」とするパロールの知見に立つように、主体の主観的心的発話態度である D-MOD を伴った文は瞬間的現在時の思考作用を指し示すものであり、「瞬間」である以上、その発話を再び行うことはできない⁴。

瞬間的現在時と持続的現在時の区別の他に、モダリティにはある種の「モダリティらしさ」という違いがある。以下と (9) を比較せよ。

(18) Intuitively, do the following pairs mean the same thing?

(18) の Intuitively は D-MOD であるが、それが (9) の Frankly と同じ「モダリティらしさ」を持っているわけではない。(9) の D-MOD は「話し手一人の完全な主観的態度」であるが、(18) の D-MOD は「話し手のみならずおおよそ全ての人の完全な主観的態度」となり、いわゆる「モダリティらしさ」が (9) の D-MOD より高い。

モダリティらしさの強弱は、発話者の心的態度における強調の現れによるところが大きい。つまり、モダリティらしさが高いほど心的態度が高いという意味で、その発話は客観性を失う。Saussure のパロールにも類似した概念であるが、文の客観性を失うと個々の文の個人的発話態度 (Idiolect) が強調されているという主観的な側面が自動的に浮き彫りにされ、その分、「瞬間的モダリティ」(Instantaneous Modality) としての無標性が高まる。

3 実現的 (Realizative) とはある従属節の命題が真であることを前提とする読みを指し、否定の移動などの概念を説明する際に用いられることがある。しかし、類似した要素の、従属節の命題を真と断定する叙実的 (Factive) という概念とは原理的に区別される。

4 パロール的な「瞬間」の概念は意味の分野のみならず音声学的な分別にも存在する。即ち、ある音を発した際に、たとえ同一人物が同じ発話をしたとしても、音声学的観点からは異なる。つまり、発話者は全く同じフォルマントや周波数である音を繰り返して発することはできない。語用論的にも同様に厳密に同じコンテキストは存在し得ないため、言語活動は瞬間的であり、その意味は必ず何らかの変化を伴う。従って、統語的解釈では (11) の曖昧性は周辺的な言語現象と説明されるのに対し、意味的・音声学的観点からは発話の瞬間性とも呼ぶべき命題及び音のとらえ方により、中心的な言語現象として考証される。詳しくは Tabayashi (2003) 他を参照。

5. 階層意味論のケーススタディ

5.1 二重否定文とモダリティ

以下では階層意味論及び極性と中立命題の関係を基に、二重否定をケーススタディとして取り上げる。通常、二重否定は以下のように二通りに解釈される。

一つ目は命題論理 (Propositional Logic) の解釈である。すなわち、 $\neg\neg P \equiv P$ という形式意味論的解釈であるが、形式意味論では自然言語の多様な語用論的意味を説明できない。従って、二つ目として一つ目の解釈を補完する自然論理 (Natural Logic) の解釈が必要になる⁵。

自然論理の解釈も含め、階層意味論では二重否定の解釈を以下のように定義している。

〈二重否定の自然論理の解釈〉

- ① 二重否定は経済性に違反するために、それが発話されるには余程の理由がなければならない。
- ② 自然言語の心理面、即ち語用論的解釈をしなければならない。
- ③ 二つの否定は同一の意味機能を持たない。

以上の定義から二重否定を分析する。まず、例外的とも言えるいわゆる黒人英語の多重否定 (Multiple Negation) を検討する。

- (19) a. He didn't give me no food.
b. He didn't give me any food.

(19a) は否定の形を形態的に持ちうる要素を全て否定の形にし、結果的に否定語が複数現れるが、全体としては否定の解釈を持つ文である。否定要素の数を問題にしないという点で、(19a) は二重否定の命題論理に縛られない表現である。即ち、(19a) は (19b) と等価であり、否定要素の数は極性変化に影響しない⁶。

しかし、多重否定でなくとも否定語が複数出現しながら二重否定文にならないことがある。

- (20) a. *No one never said nothing* about it.
b. *No one never said anything* about it.

(20a) に出現する否定極性項目 *nothing* は二重否定として機能せず、否定語の重複による否定の強調の意味を担っているに過ぎない⁷。従って、(20a) と (20b) の真理値は等価 (否定文) である。

5 記述文法に最初に意味を取り入れたのが他ならぬ Chomsky 自身である (Chomsky (1965) などを参照)。

6 以下のように、スペイン語でも否定要素の数を問題にしない例がある。

- (i) El no me dio ninguna comida.
(ii) 誰も何も持ってこなかった。

(i) は否定要素が二つ出ているが、全体として否定文である。これは否定要素の位置に関する問題であり、スペイン語に二重否定が存在しないわけではない。日本語では (ii) が示すように否定極性項目 (Negative Polarity Items) が否定語「ない」に先行する形で複数出現することがあるが、「誰も」や「何も」は否定語として機能しない。詳しくは田林 (2008) 参照。

7 *nothing* が否定語として機能する証左として、(i) と (ii) の真理値が等価であることが挙げられる。

- (i) I said nothing.
(ii) I didn't say anything.

同一節内で否定要素が複数出現し、結果として二重否定（真理値は肯定）となる文は、以下のよう
な例である。

- (21) a. I *haven't* done *nothing*.
b. I have done something.
(22) *No one* has *nothing* to offer to society.

(21a) と (21b) の真理値は等価であるが、その含意される意味は異なる。いわゆる語用論的含意
の違いを明確にするために、二重否定を複文で表すという方法がある。(21a) は (23) に、(22) は
(24) にそれぞれ対応する。

- (23) It is *not* the case that I have done *nothing*.
(24) There is *no one* who has *nothing* to offer to society.

(23) 及び (24) は、それぞれ以下のような一般的スキーマに還元できる。

- (25) [S…not… [that…nothing]]
(26) [S…no… [who…nothing]]

(25) の not 及び (26) の no は埋め込み文の外にあるから外部否定であり、(25) 及び (26) の
nothing は埋め込み文の中であるから内部否定である。従って、(21a) の *haven't* は外部否定に対応
し、*nothing* は内部否定に対応する。よって、外部否定は命題内容よりも高次の位置にあるためモダ
リティ内否定であり、内部否定は客観的な命題内否定である。

さて、(23) は否定辞 *not* が外部否定になっている時には、それは原則的に真理構文と関係づけら
れるのに対し、N-word が外部否定になっている (24) では、それは存在構文と関係づけられる。こ
れは (23) の It is not the case that が真理述語である (be) the case を否定して否認の意味を表
すのに対し、(24) の There is no (one / thing) that は存在述語を否定し、非存在の意味を表す
からである。この区別は *not* が述語否定辞なのに対し、N-word が存在限量詞であることから導き
出される。

モダリティ内否定は常に心的態度を否認するわけではない。(21a) の否定要素は心的態度を否定
しているわけではなく、あくまで命題内容に関わるモダリティを否定しているに過ぎない。従って、
モダリティ内否定は否定表現を含んだモダリティを否定する可能性を持ち、真理値に影響を与えるた
めに S-MOD に対応する。一方、命題内否定は客観的命題を否認するので、階層意味論モデルでは
POL (PROP3) に対応する。従って、(21a) の *nothing* は POL の否定値である。つまり、POL が
中立命題の極性を決定する要素となる。伝統的生成文法の「最初に肯定ありき」という観点及び「肯
定が無標、否定が有標にそれぞれ対応する」という原理的な立場を取るわけではなく、肯定も否定も
両者とも有標的な存在であり、それが中立命題に適用されて表出された際に、より無標の方が肯定
表現であり、より有標らしい方が否定表現となる。即ち、肯定と否定に代表される極性表現はどちら
も有標的な表現であり、違いはその程度差に起因する。

階層意味論モデルでは、統語的に二つの否定要素が出現した場合、一方は必ず意味的にモダリティ
否定に相当する⁸。

二重否定の意味構造を図式化すると、以下のようになる。なお、(27a) と (27b) は等価であるが、それぞれ DENY と REJECT の存在により、語用論的に違いがある。

- (27) a. [I DENY] [NOT [PROP3]] (=S-MOD 否定)
b. [I REJECT IT AS NOT TRUE] [NOT [PROP3]]

(21a) を (27a) の概念的スキーマに当てはめると、以下のようになる。

- (28) [I DENY] [NOT [I HAVE DONE ANYTHING]]

また、モダリティ内否定は平叙文、即ちモダリティに関して無標の表現に断定の陳述態度と外部否定が適用され、否認という複合的モダリティが構築されるため、繰り返し否定 (Echo Negation) としても解釈可能である。繰り返し否定は先行発話を全て否定するメタ言語否定と同義である。

- (29) a. Of course, you two *don't* drink, do you?
b. Well, we *don't not* drink.

(29a) に対する繰り返し否定の返答 (29b) は「飲まないわけではない」と解釈される。先行発話を否定する二重否定文 (29b) において、(29a) を否認しているのは not である。よって (29b) では not が外部否定、即ちモダリティ内否定に、don't が内部否定、即ち命題内否定にそれぞれ相当する。

5.2 焦点化と話題化

本稿でもう一つ区別しておかなければならないのが、モダリティ表現での話題化と焦点化の問題である。階層意味論における焦点化では、焦点因子、即ち焦点を引き起こす要素は D-MOD であり、一方、焦点部位、即ち焦点となる要素は命題内容である。

- (30) a. グラスに 水が半分も はいっている。
b. グラスに 水が半分しか はいっていない。
(31) グラスに 水が半分 はいっている。

(30a) と (30b) において、それぞれ取り立て助詞の「も」と「しか」は「半分」を焦点化し、話者の心的態度 (モダリティ) を変化させている⁹。だが、話者の心的態度にかかわらず、客観的事象は (31) で表すことができ、(30a) と (30b) の真理値は等価である。従って焦点助詞や取り立て助詞などの語彙項目は命題内容ではなく、発話態度の表現に貢献する。しかし、取り立て助詞そのものは S-MOD ではない。何故なら、S-MOD は命題態度を表し、この場合「平叙文であり、肯定内容を表し、そして断定を表す」という性質を持つためである。よって焦点因子は D-MOD に相当し、そし

8 統語構造と意味構造を結び付けているものが Jackendoff (1997) の主張する Correspondence Rule であるが、その対応規則そのものは階層意味論では未だに説明付けられておらず、今後の課題となる。

更に、外部否定と内部否定はそのまま否認態度と否認内容という言葉に置き換えられる。否認 (Denial) とは否認内容と否認態度の統合であり、否定の対象は S-MOD である。

9 (30) はモダリティに関する焦点化のほかに、図と地の関係でも表されうる。詳しくは Langacker (1987) 他を参照。

て「グラスに水が半分ある」という事象は (30a), (30b) とともに変化せず, 焦点因子を除いた (31) が示すように, 焦点部位である「半分」は命題内容である。

以上の論述は, 焦点助詞や取り立て助詞のみならず, 分裂構文や真理条件・非真理条件を左右する副詞にも適用することができる。

- (32) a. It was John who died.
b. Who died?
c. JOHN died.

これは以下のようなスキーマで表すことができる。

- (33) a. [I STATE] [POS [IT WAS JOHN] [WHO DIED]]
b. [I ASK] [POS [WHO DIED]]
c. [I STATE] [POS [JOHN DIED]]

(32) で焦点化が起こる場所は語彙項目 JOHN であるが, 以下の Yes/No 文ではやや異なる¹⁰。

- (34) Is Bob married?
(35) a. No, I think not. (=否定命題を肯定的に判断)
b. No, I don't think so. (=肯定命題を否定的に判断)

上の例文も同じように以下のスキーマで表すことができる。

- (36) [I ASK] [POS [BOB IS MARRIED]]
(37) a. [I THINK] [NOT [BOB IS MARRIED]]
b. [I DON'T THINK] [POS [BOB IS MARRIED]]

(36) において, 焦点因子は ASK, 焦点部位は POS である。同様に, (37a) と (37b) において焦点因子はそれぞれ THINK と DON'T, 焦点部位はそれぞれ NOT と POS であり, 語彙項目ではなく極性値が焦点部位となる。以上を踏まえた上で, 以下の文を参照のこと。

- (38) a. He is not coming to class because he is sick.
b. He is not coming to class because his wife told me.

(38a) の because 以下は因果関係を表す客観的事象のため, 命題内容である。一方, (38b) の副詞節は伝聞内容を叙述しているため, それが客観的事実であるかどうかは判断がつかず, 話者の心的態度による D-MOD であると規定できる。副詞節が D-MOD か命題内容かの区別は, 当該文を分裂構文に変換するというテスト方法で判明する。分裂文に変換させた結果不適格になった場合は D-MOD である。

- (39) a. It is because he is sick that he is not coming to class.

10 (35) は焦点化以外にも, 否定語が主節から従属節に移動する否定の移動 (Negative Transportation) の解釈の他, 否定語 not と話し手 I の心理的距離がそのまま語の隔たりにシフトされる認知的な解釈がある。前者については田林 (to appear), 後者については山梨 (1995) を参照のこと。

- b. #It is because his wife told me that he is not coming to class.

以上から、「焦点因子は D-MOD に相当し、命題内容は焦点部位になりうるが、D-MOD は焦点部位にはなりえない」という定理を導き出すことができる。

さて、真理条件・非真理条件を左右する副詞において、Sperber & Wilson (1986) が主張する関連性理論でも以下のように階層意味論と同じ説明が適用される¹¹。

- (40) If John is unfortunately ill, we should cancel the lecture.
(41) a. If John is ill, we should cancel the lecture.
 b. #If it is unfortunate that John is ill, we should cancel the lecture.
(42) If John is allegedly ill, we should cancel the lecture.
(43) a. #If John is ill, we should cancel the lecture.
 b. If it is alleged that John is ill, we should cancel the lecture.

(40) の発話者は (41a) を意図したものである (即ち、(40) の命題は (40) から副詞 *unfortunately* を除いた (41a) である)。講演を中止にするのは「ジョンが病気だから」であり、「ジョンが病気であるのが残念だから」ではない。つまり真理値には無関係という意味で非真理条件的である。一方、(42) の発話者は (43b) を意図したものであり、(43a) は不適格である。即ち、(42) において講演を中止にするのは「病気だという話なら」であって、「本当に病気だから」という論拠が成り立つという保証はどこにもない (例えば、ジョンが仮病を使っていることもありうる)。従って真理値に貢献しており、真理条件的である。

この点で、(40) の *unfortunately* と (42) の *allegedly* は同じ副詞という文法範疇でありながら、機能が違うことになる。また、*if* 節での証明のみならず、原因・理由を表す *because* 節でも同じようなテストが可能である。

- (44) Because John is unfortunately drunk, the lecture is cancelled.
(45) a. The lecture is cancelled because John is drunk.
 b. #The lecture is cancelled because it is unfortunate that John is drunk.
(46) Because John is allegedly drunk, the lecture is cancelled.
(47) a. #The lecture is cancelled because John is drunk.
 b. The lecture is cancelled because it is alleged that John is drunk.

よって、関連性理論の立場からも、文副詞のうち、発話内的副詞と態度の副詞は非真理条件的、即ち D-MOD であるが、証拠的副詞と伝聞副詞は発話内行為理論の主張とは異なり真理条件的、即ち S-MOD であると説明される。

話題化は焦点化とリンクして考察される。取り立ては話し手が特定のコンテキストを前提として情報をどのように呈示するかという機能を持つという点で、焦点化と話題化は相互補完的である。だが、この二つの相対立は、話題化が話題と陳述からなる文を作り上げるのに対して、焦点化は焦点と前提からなる文を作り上げるという点で異なる。

11 関連性理論については今井 (2001) も詳しい。

- (48) a. 太郎が学校に行った。
b. 太郎は学校に行った。

(48b) は助詞「は」によって「太郎」が取り立てられ、話題化されている。即ち、「太郎」が既知情報として知られているという含意を持ちうる。一方、(48a) の「太郎が」は主格であると同時に焦点化されている。なぜなら、焦点となるのは未知情報であり、(48a) では、学校に行った行為者を伝聞の主体として置いているという含意を持ちうるからである。

以上のように、焦点化と話題化は相互補完的ではあるが、取り立ては D-MOD であるのに対し、焦点化される部位は命題内容である。しかし、その意味自体は話題化及び焦点化では如何なる影響も被らない。

6. 結 語

階層意味論モデルは、客観的意味に主観的意味を組み込んだ理論である。文の意味内容はモダリティと命題内容とする二極化構造を成し、モダリティは主観的磁場を、命題内容は客観的磁場を形成する。しかしモダリティそれ自体が演算子として作用するため、階層意味論モデルは主観的意味論 (Subjective Semantics) の具体的例証である。その他、本動詞説や Croft (1990) の「CAUSE-BECOME-STATE」と対立する「状態・過程・行為」の理論などがある。

本稿では階層意味論の全体像を概観した上で、それが焦点化と話題化、二重否定文などに応用されることを見た。また、関連性理論との関連も同時に示唆した。今後、日本語や英語以外の他言語にも適用可能かどうか検討することを課題とする。

参考文献

- Austin, J. L. (1962) *How to Do Things With Words*. Oxford University Press.
- Benveniste, E. (1966) *Bulletin de la société de linguistique de Paris; problèmes de linguistique générale*. Gallimard.
- Bloomfield, L. (1933) *Language*. Holt, Rinehart and Winston.
- Chafe, W. L. (1970) *Meaning and the Structure of Language*. University of Chicago Press.
- Chomsky, N. (1957) *Syntactic Structures*. Mouton de Gruyter.
- Chomsky, N. (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*. MIT Press.
- Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding*. Mouton de Gruyter.
- Croft, W. (1990) *Typology and Universals*. Cambridge University Press.
- Horn, L. (1984) "Toward a New Taxonomy for Pragmatic Inference: Q-based and R-based Implicature." In *Meaning, Form, and Use in Context: Linguistic Applications*. (eds.) D. Schiffrin. Georgetown University Press, 11-42.
- 今井邦彦 (2001) 『語用論への招待』大修館書店。
- Jackendoff, R. (1990) *Semantic Structures*. MIT Press.
- Jackendoff, R. (1997) *The Architecture of the Language Faculty*. MIT Press.
- Kajita, M. (1968) *A Generative-Transformational Study of Semi-Auxiliaries in Present-Day American English*. 三省堂。

- Lakoff, G. & M. Johnson. (1980) *Metaphors We Live By*. University of Chicago Press.
- Langacker, R. W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar 1: Theoretical Prerequisites*. Stanford University Press.
- Langacker, R. W. (1990) "Subjectification", *Cognitive Linguistics* 1 (1): 5-38.
- Langacker, R. W. (1991) *Foundation of Cognitive Grammar 2: Descriptive Application*. Stanford University Press.
- Leech, G. (1974) *Semantics*. Penguin.
- Lyons, J. (1983) *An Introduction to Theoretical Linguistics*. Cambridge University Press.
- 中右実 (1994) 『認知意味論の原理』大修館書店.
- 西村義樹 (2000) 「対照研究への認知言語学的アプローチ」『認知言語学の発展』ひつじ書房. 145-166.
- Sperber, D. & Wilson, D. (1986) *Relevance: Communication and Cognition*. Blackwell.
- Tabayashi, Y. (2003) *Aplicación de la semántica jerárquica y la teoría de prototipo en la preposición EN —Con especial atención a la polaridad de EN*. Tesis de Máster. Universidad de Sofía.
- 田林洋一 (2008) 『スペイン語の否定語における意味構造について』清泉女子大学博士論文.
- 田林洋一 (to appear) 「否定の移動に関する諸条件の考察」『語学教育研究論叢』第 27 号.
- 時枝誠記 (1941) 『国語学原論』岩波書店.
- 渡辺実 (1971) 『国語構文論』塙書房.
- 山田孝雄 (1908) 『日本文法論』宝文館.
- 山梨正明 (1995) 『認知文法論』ひつじ書房.

(たばやし よういち 総合教育センター)